

④ 「長崎高商から長崎大学経済学部へ六十年の歩み」―瓊林会編を読む

東京オリンピックの翌年、母校創立60周年を記念して編纂されたアルバムである。B5判横綴じ59頁の本書は、写真40頁と文章19頁が交互に並べられ、巻末に10頁の母校史年表が付く平易で明快な構成となっている。表紙は母校の空中俯瞰写真、裏表紙は長崎市中央部と港・稲佐山・対岸地区の俯瞰である。本書の中に入って先ずは①校門・学校表札(経専・学部・短大英語)・校舎玄関・花タイルの写影に「原田会長・河野学部長挨拶」。②歴代校長(高商11代・学部5代・短大1)の肖像・校旗・校章を並べて、傍らに「明治時代の校長」「校歌―牛島秀雄氏」紹介文を置く。③「瓊林会」では歴代会長6氏を置き「瓊林会」のいわれを説き、松原顧問の「60年を迎えて」を続ける。④では「浅野・武藤両先生のこと」を語り、「思ひ出の諸先生像―浅野・武藤・田崎・野崎・今村先生の写真を飾る。⑤は「研究館(瓊林会館)」と「東南アジア研究所」の写真と経緯。⑥では「校内風景」「運動会・自彊寮風景」に夫々数葉の写真を費やし、文章では第1回卒業生・高島勘一氏の「回顧六十年」・戦中派の回想「暁星淡く」「この道はいつか来た道―県立高女の西山道」更に塚原仁先生の「母校の春」などが語られる。最後には⑦「ながさき所々」懐かしの長崎風景・傘鉾・龍踊と大徳寺のぼた餅と浦上天主堂の遺跡…の写真。本来ならアルバムはこれで目出度く出来上がりとなる。

処が昭和39年1月、大学本部・和泉学長から河野学部長へ、経済学部の文教地区への移転申し入れが行われ、学部は教授会・学生・同窓会を挙げて移転反対を表明し、市民を巻き込んだの署名運動を展開した。その結果、本アルバムを発刊した昭和40年秋は、移転撤回の方向で「当面の問題は一応落ち着いた様で」あったが、本書は特別に、「長崎高商創立の経緯」に続けて「移転問題について」の2頁を設けて、次の如く同窓会の意見を述べている。「吾が學園は決して一朝一夕に成ったものではない…同窓の血と魂を込めて育て上げられ、60年の歴史が秘められた共同の媒体であって同族意識―が生まれ、母校への愛情が育まれ美しい伝統が培われる。この教育最良の場を納得いかない理由によって易々として放棄できないことは言うまでもない」「現敷地に堂々たる新校舎が建てられ…学部が隆々たる校運を迎えるまでは…瓊林会の総力を挙げて初志貫徹に邁進する」。かくて母校創立65年には改築された新校舎が竣工した。

さて創立50年史と65年史の間に挟まる本アルバムは、当時の下山可明事務局長(16回)・平尾勇(38回)助教授を軸に編纂されたプレーンな好著である。けれど今に想う感想を3つ。①大学になって16年目。学部時代の事歴(教科・教官・学生)が少ないこと。②学部世代(学1回卒)は当時39歳、既に社会の中堅であった筈だが、編集スタッフへ参加は無理であったのか。③「現代学生生活」(デモ・パチンコ・ダンス・英語ガイド)の写真はあるのだが、今一つ気力に乏しく、未だまだ高商世代向けのアルバムでしかなかったようだ。(04/08)

☆本書の周辺☆ 私は最近8月初めまで、本書の存在さえ知らなかった。事務局の奥の方に3冊程仕舞われていた。移転反対の市民署名簿は今も大切に保管されている。

